

# 幼少期における親の言葉かけと子どもの考え方や性格との 関連性について

高妻 弘子

## The influence of parental speech on the development of thought and characteristics of children in Early Childhood

Hiroko KOZUMA

### 1 はじめに

幼児期にかけられた言葉は人格の形成に影響を及ぼすのだろうか。人が生きていくうえで言葉は大変重要なものである。それは人と人を繋ぐコミュニケーションツールでもあり、自分の思いを伝える一手段でもある。オーストラリアの絶対音感の持ち主である Priscilla Dunstan ([https://en.wikipedia.org/wiki/Dunstan\\_Baby\\_Language](https://en.wikipedia.org/wiki/Dunstan_Baby_Language)) は、聞いた音を映像記憶のように正確に記憶できるという能力によって、生まれたばかりの赤ちゃんは 5 つの泣き声をもっており 3 ヶ月までは全世界共通であることを発見した。3 ヶ月を過ぎると多様性をもっていた音声は次第に母国語に集約されていくとしている。言葉の獲得については発達による個人差もあるが、親や兄弟姉妹、周囲の大人の影響が大きいことは言うまでもない。幼児はどのような言葉を聞いて育っているのだろうか。自分の起こした行動に対してどのような言葉かけをされてきたのだろうか。

近年、書店には子育てに関する書籍が多く見られるようになってきている。言葉かけに関するものも少なくはない。『子どもの人生を一生幸せにする愛の言葉かけ』矢野惣一 (2014)、『この「言葉かけ」が子どもを伸ばす!』汐見稔幸 (2012) などである。なかでも『子どもが育つ魔法の言葉』ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス、石井千春=訳 (1999) は有名である。ドロシー博士 (2005 年永眠) はアメリカの子育てカウンセラーとして著名であり、1999 年に邦訳を発売以来、大きな反響を巻き起こし、2006 年 9 月、単行本と文庫を合わせて発行部数 270 万部を超える大ベストセラーとなった。とくに 2005 年 2 月、皇太子殿下が誕生日の記者会見にてドロシー博士の詩「子は親の鏡」を朗読されたことで、日本国中にドロシーブームが起きた。株式会社 PHP 研究所は、2017 年 3 月『子どもが育つ魔法の言葉』(1999)、『10 代の子どもが育つ魔法の言葉』(2002) を電子書籍として配信開始を始めている。ドロシー博士の詩「子は親の鏡」は次のようなものである。

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる  
とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる  
不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる  
「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる  
子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる  
親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう  
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる  
広い心で接すれば、キレる子にはならない  
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ  
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ  
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる  
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる  
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ  
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る  
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ  
やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ  
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ  
和気あいあいとした家庭で育てば、子どもは、この世はいいところだと思えるようになる

ドロシー博士は、詩を一連ごとに取り上げ、事例を通して言葉かけの違いによる子どもの反応や心の成長を具体的に示している。他にも書店等に並ぶ育児書には同じようなことが書かれている。どの文も納得するものがある。言われてみれば確かにそうだ。どの本にも理想的な子育て論が綴られているが、すべての子どもにとってそうだとはい切れるだろうか。叱られることが多かった子どもでも自分は悪い子だと思っていなかったり、たくさん励ましてもらったのに自信がなかったりする子どもはいないのだろうか。筆者は 22 年幼児教育の現場経験がある。今までたくさん子ども達、保護者と出会ってきた。とげとげした言葉遣い、頭ごなしに叱りつける、何でも受け入れ過保護な子育て、今までほとんどほめたことがない…というように様々な保護者がいたが、この詩の通りに子どもが育っていたかというところでもないこともあった。そこで、今回の研究では親の言葉かけがどのように子どもの考え方や性格に影響を及ぼすのか、関連性を検証することを目的とする。

今回は、ドロシー博士の「子は親の鏡」19 連の中から幼児期の子どもでも分かりやすく印象に残りやすい下記の 4 連に絞って調査した。

子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる  
叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう  
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる  
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる

保護者の態度や行動と子どもの性格についての研究は多くあるが、保護者の子どもに対する言葉かけと子どもの性格についての研究は少ない。森下・藤村（2013）の小学校の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響についての研究では「自己抑制」「自己主張」「明確さ」「忍耐」を促進するような言葉かけ因子が見出されており、自己抑制を促す言葉かけは子どもの自己抑制力に影響しないこと、自己主張を促進する言葉かけが多い場合は自己抑制が発達することが明らかになっている。また、森下・松山（2014）の中学・高校時代の言葉かけが女子大学生の母子関係に与える影響を調べた研究では、母親の言葉かけの分析結果から「寄り添い」「否定拒否」「突き放し」「なぐさめ」「受容支持」の 5 つの因子を見出している。しかし今回はドロシー博士の「馬鹿」「叱り」「励まし」「認め」がポイントとなる。そこで、

それらの先行研究を参考に質問紙を独自に作成することとした。

## 2 予備調査

幼児期の日常生活において幼少期に親からかけられると想定される言葉にはどんなものがあるか「馬鹿にされた言葉」「叱られた言葉」「励まされた言葉」「認められた言葉」の4枠について短大生71名に自由記述式の予備調査をおこなった。幼児期に比較的誰もが経験するであろう場面、たとえば「何かに失敗したとき」「好き嫌いをしたとき」など15場面を想定し、できるだけ具体的に記述してもらった。自身の記憶が曖昧、また、覚えていない等の場合は近所の親子関係で耳にした言葉や親戚を対象としてもよいことを伝え、思いつく限り書き出してもらい質問紙を作成した。

項目については馬鹿にされる・叱られる・励まされる・認められるであろう状況を平均的に取り上げ、偏りのないように配慮した。

## 3 本調査

幼少期に親からかけられた言葉と現在の自身の考え方や性格との関係を検証するために、短大生を対象に質問紙調査をおこなった。

### (1) 調査対象

短大生228名(1年生191名、2年生37名)を対象に質問紙調査を実施した。そのうち有効回答が得られた219名(1年生185名、2年生34名)のデータについて分析をおこなった。

### (2) 質問紙の作成

親からの言葉かけについての項目は日常生活において想定される場面と予備調査で得た回答から質問紙を作成し用いた(表1)。幼児教育に携わったものからすると、「だっせー」「ぐず」「あほじゃないと？」等の言葉を子どもにかけるのかと驚きもあったが、書き出された言葉を分類し代表的な2~3例をあげ、学生の言葉をそのまま使用した。表現が適切ではないかもしれないが、学生の書き出した言葉が身近なものであると考えたからである。また、かけられた言葉は覚えていなくてもその時の印象が残っていれば選択しやすいと思い、語尾に(馬鹿にされた言葉)(励まされた言葉)等と付け加えた。

考え方や性格については自己肯定感尺度の中から尺度を絞って用いることとした。

ドロシー博士の「馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる」では、引っ込みじあんなを自己表明・対人積極性と捉え、平石(1990)の自己肯定意識尺度8項目、佐伯ら(2006)の自己効力感・自己肯定感尺度32項目のうち6項目を用い、「私は引っ込みじあんです」の項目を加えた。「叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう」「励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる」では、自己実現的態度・充実感と捉え、平石(1990)の自己肯定意識尺度16項目、佐伯ら(2006)の自己効力感・自己肯定感尺度32項目のうち8項目を用い「自分は悪い子だと思っています」「私は自分に自信があります」の2項目を加えた。「認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる」については自己受容と捉え、平石(1990)の自己肯定意識尺度8項目のうち7項目を用い「私は自分のことが好きです」の1項目を加えた(表2)。

表1 幼少期に親からかけられた代表的な言葉について

問 1. 手伝いをしているとき	1. そんなこともできんとね? あんたにできる? など(馬鹿にされた言葉) 2. さわるな もう何もせんで なにやってるの など(叱られた言葉) 3. ○○ちゃんならできるよ あと少しだから頑張って など(励まされた言葉) 4. ありがとう助かるわ 嬉しい いてくれてよかった など(認められた言葉)
問 2. きょうだいでケンカをしたとき	1. あんたが馬鹿やかいよ くだらん そんなことで? など(馬鹿にされた言葉) 2. いい加減にしないよ やめなさい 自分が悪いんでしょ など(叱られた言葉) 3. 気にせんでいいが きっと仲直りできるよ など(励まされた言葉) 4. ケンカの理由は何だったの? 悲しかったね など(認められた言葉)
問 3. 何かに失敗したとき	1. ほらやっぱりね だっせー あ〜できんかったっちゃなど(馬鹿にされた言葉) 2. 何で失敗するの だから言ったでしょ いい加減にして など(叱られた言葉) 3. 次は出来るよ もう1度やってみようか 大丈夫 など(励まされた言葉) 4. そこまで出来れば大丈夫 ここまでできてすごいね など(認められた言葉)
問 4. 食べ物の好き嫌いをしたとき	1. そんなのも食べれんと? えっやばっ よわ〜い など(馬鹿にされた言葉) 2. 残すな 食べるまでそこにおんないね 食べなさい など(叱られた言葉) 3. 少しでも食べてみようか 食べれるが 大きくなるよ など(励まされた言葉) 4. 苦手なんだね 今は食べられないけど今度頑張ろう など(認められた言葉)
問 5. 何かができるようになったとき	1. そんなのもできんかったと? いまさら? おっせーなど(馬鹿にされた言葉) 2. できて当たり前でしょ もっと上手にできないの など(叱られた言葉) 3. すご〜い さすが 頑張ればもっと上手にできるよ など(励まされた言葉) 4. 頑張ったね やればできるね 信じてたよ 教えて など(認められた言葉)
問 6. 進んで片付けをしたとき	1. 当たり前でしょ なんて時間がかかると など(馬鹿にされた言葉) 2. めちゃくちゃじゃん 余計なことせんで など(叱られた言葉) 3. すごいね〜 えらいね 上手にできるかな など(励まされた言葉) 4. ありがとう 頑張ってるね 助かるわ 上手ね など(認められた言葉)
問 7. 夜いつまでも起きているとき	1. 1人じゃ眠れんと? 外で寝る? おっぱい飲む? など(馬鹿にされた言葉) 2. いつまで起きちよっと? 早く寝なさい うるさい など(叱られた言葉) 3. 目を閉じてみて 早く寝れるかな? など(励まされた言葉) 4. 今日外で遊ばなかったもんね 眠くない日もあるよねなど(認められた言葉)
問 8. 友達とケンカしたとき	1. 馬鹿じゃない あんたが余計なことしたからよ など(馬鹿にされた言葉) 2. 人のせいにしない あんたが悪い 謝った? など(叱られた言葉) 3. 心配ないよ 元気をだして よい経験になったね など(励まされた言葉) 4. 嫌やったっちゃね 自分の意見が言えたんだね など(認められた言葉)
問 9. 何かに怖がったとき	1. そんなのが怖いと? 弱虫 情けない など(馬鹿にされた言葉) 2. うるさい 怖くない いい加減にしなさい ダメな子 など(叱られた言葉) 3. 怖がらなくても大丈夫だよ 一緒にやってみようか など(励まされた言葉) 4. 怖そうやね 誰でも怖いことはあるよ 怖かったね など(認められた言葉)
問 10. 新しいことに挑戦するとき	1. 無理無理 どうせ3日坊主でしょ できないくせに など(馬鹿にされた言葉) 2. やめとけ またそんなことすると? もうするな など(叱られた言葉) 3. きっとできるよ 応援してる やるだけやったら? など(励まされた言葉) 4. 挑戦するってすごい うまくいくといいね 信じてるよなど(認められた言葉)
問 11. 園や学校の先生に叱られたとき	1. またっ? お兄ちゃんはできるのに あほじゃないと?など(馬鹿にされた言葉) 2. あんたがいけないでしょ 何やってるの 反省してる?など(叱られた言葉) 3. 今度頑張ればいいよ 明日はいいことある 勉強になったね など(励まされた言葉) 4. そんなこともあるよ それでも大好きだよ つらかったね(認められた言葉)
問 12. 朝、遅れそうになったとき	1. 早起きできんもんね ぐず のろま など(馬鹿にされた言葉) 2. 早く起きないからでしょ 夜更かしするからよ おいていくよ など(叱られた言葉) 3. 急げ急げ 先生や友達が待ってるよ 一緒に準備しようか など(励まされた言葉) 4. いつもはできてるもんね 理由を話せば分かってもらえるよ など(認められた言葉)
問 13. 食事を全部食べたとき	1. 時間かかったね やっと食べたの? 食べ方汚い など(馬鹿にされた言葉) 2. 遅い きれいに食べなさい 食べて当たり前でしょ など(叱られた言葉) 3. よく食べたね 元気がでるね パワーもりもりだね など(励まされた言葉) 4. 頑張ったね すごいね 大きくなれるよ など(認められた言葉)
問 14. 園や学校の先生にほめられたとき	1. できて普通じゃん それぐらいでほめられたの? など(馬鹿にされた言葉) 2. 何で今までできんかったと もっとできるでしょ など(叱られた言葉) 3. これからも応援してるよ 今度も楽しみにしてるね など(励まされた言葉) 4. 頑張ってたもんね 本当によくできたね さすがだね など(認められた言葉)
問 15. 出かける準備が早くできたとき	1. 忘れ物してますけど やつとできたの? など(馬鹿にされた言葉) 2. もっと早くできないの 忘れ物とかないの など(叱られた言葉) 3. 明日も楽しみだな お姉(兄)ちゃんになるね など(励まされた言葉) 4. 早くできたね さすが私の子ども 頑張ったもんね など(認められた言葉)

表 2 現在の考え方や性格について

	4 当てはまる (そうだ)	3 どちらかといえば当てはまる (そうだ)	2 どちらかといえば当てはまらない (違う)	1 当てはまらない (違う)
問 1. 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができます	4	3	2	1
問 2. 自主的に友人に話しかけていきます	4	3	2	1
問 3. 疑問だと感じたらそれを堂々と言えます	4	3	2	1
問 4. 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしています	4	3	2	1
問 5. 人前でもありのままの自分を出せます	4	3	2	1
問 6. 友達と真剣に話し合います	4	3	2	1
問 7. 私は引っ込み思案です (*)	4	3	2	1
問 8. 欠点の 1 つや 2 つあってもかまわないと思います	4	3	2	1
問 9. 自分なりの個性を大切にしています	4	3	2	1
問 10. 自分にはよい面がたくさんあります	4	3	2	1
問 11. 自分のよいところも悪いところもありのままに認めることができます	4	3	2	1
問 12. 自分には自分なりの人生があってもよいと思います	4	3	2	1
問 13. 自分の悪いところは気になりません	4	3	2	1
問 14. 自分の個性を素直に受け入れています	4	3	2	1
問 15. 私は自分のことが好きです	4	3	2	1
問 16. 張り合いがあり、やる気があります	4	3	2	1
問 17. 自分を失うことなく、自分の道を進んでいます	4	3	2	1
問 18. 前向きな姿勢で物事に取り組んでいます	4	3	2	1
問 19. 生活がすごく楽しいと感じています	4	3	2	1
問 20. 自分の好きなことがやれていると思います	4	3	2	1
問 21. 自分が立てた計画はうまくいく自信があります	4	3	2	1
問 22. 夢や目標をもっていますか	4	3	2	1
問 23. 誰かが悪いことをしたときに、それをやめるように言います	4	3	2	1
問 24. 自分は悪い子だと思っています	4	3	2	1
問 25. 私は自分に自信があります	4	3	2	1

## 4 結果

### (1) 幼少期に親からかけられた代表的な言葉について

全体の結果を表 3 に示した。まず全体像を見てみると、どの項目においても低い割合をしめたのが馬鹿にされた言葉である。ほぼ 5.0%未満であり 0.0%の項目もあった。そのなかでも 1 番高い割合をしめたのは 10. 新しいことに挑戦するときで 10.0%であった。叱られたと感じたのは、2. きょうだいでケンカをしたとき (63.2%) 7.夜、いつまでも起きているとき (50.2%) 12.朝、遅れそうになったとき (51.1%) の 3 項目で高い割合をしめた。同じく、励まされたと感じた項目で高い割合をしめたのは、3.何かに失敗したとき (64.8%) 4.食べ物の好き嫌いをしたとき (63.5%) 10.新しいことに挑戦するとき (71.7%) の 3 項目であった。また、認められたと感じた項目で高い割合をしめたのは 1.手伝いをしているとき (84.5%) 6.進んで片付けをしたとき (64.8%) 14.園や学校の先生にほめられたとき (75.3%) の 3 項目であり、認められと励まされが同等の割合になったのは、5.何かができるようになったとき (47.5%) (46.6%) 9.何かに怖がったとき (42.0%) (46.1%) 13.食事を全部食べたとき (47.5%) (44.7%) 15.出掛ける準備が早くできたとき (43.4%) (39.7%) の 4 項目であった。

表 3 自身がかけられた言葉の全体の割合

項目		平均	4 (認められ)	3 (励まされた)	2 (叱られた)	1 (馬鹿にされた)
幼少期 かに け親 から かけ られ た 言葉 につ いて	1. 手伝いをしている時	3.8	84.5%	9.1%	4.1%	2.3%
	2. きょうだいでケンカをしたとき	2.45	20.1%	13.7%	63.2%	2.9%
	3. 何かに失敗したとき	3.08	21.9%	64.8%	12.3%	0.9%
	4. 食べ物の好き嫌いをしたとき	2.94	17.8%	63.5%	18.7%	0.0%
	5. 何かができるようになったとき	3.41	47.5%	46.6%	5.5%	0.5%
	6. 進んで片付けをしたとき	3.59	64.8%	30.1%	2.3%	2.7%
	7. 夜、いつまでも起きているとき	2.62	11.9%	37.9%	50.2%	0.0%
	8. 友達とケンカしたとき	2.89	29.7%	34.7%	32.0%	3.7%
	9. 何かに怖がったとき	3.26	42.0%	46.1%	7.8%	4.1%
	10. 新しいことに挑戦するとき	2.89	15.1%	71.7%	3.2%	10.0%
	11. 園や学校の先生に叱られたとき	2.81	18.7%	47.9%	29.2%	4.1%
	12. 朝、遅れそうになったとき	2.54	8.2%	39.7%	51.1%	0.9%
	13. 食事を全部食べたとき	3.38	47.5%	44.7%	5.5%	2.3%
	14. 園や学校の先生にほめられたとき	3.73	75.3%	20.5%	3.2%	0.9%
	15. 出かける準備が早くできたとき	3.22	43.4%	39.7%	14.6%	2.3%

(2) 幼少期に親からかけられた言葉と自己肯定感の関係について

表 2 のアンケートからそれぞれ個人の「自己表明・対人積極性」「自己実現的態度・充実感」「自己受容」の平均値を求めた。平均値の 1~1.4 を 1 群、1.5~2.4 を 2 群、2.5~3.4 を 3 群、3.5~4 を 4 群とし、かけられた言葉に対する 1~4 群の割合を図にした。

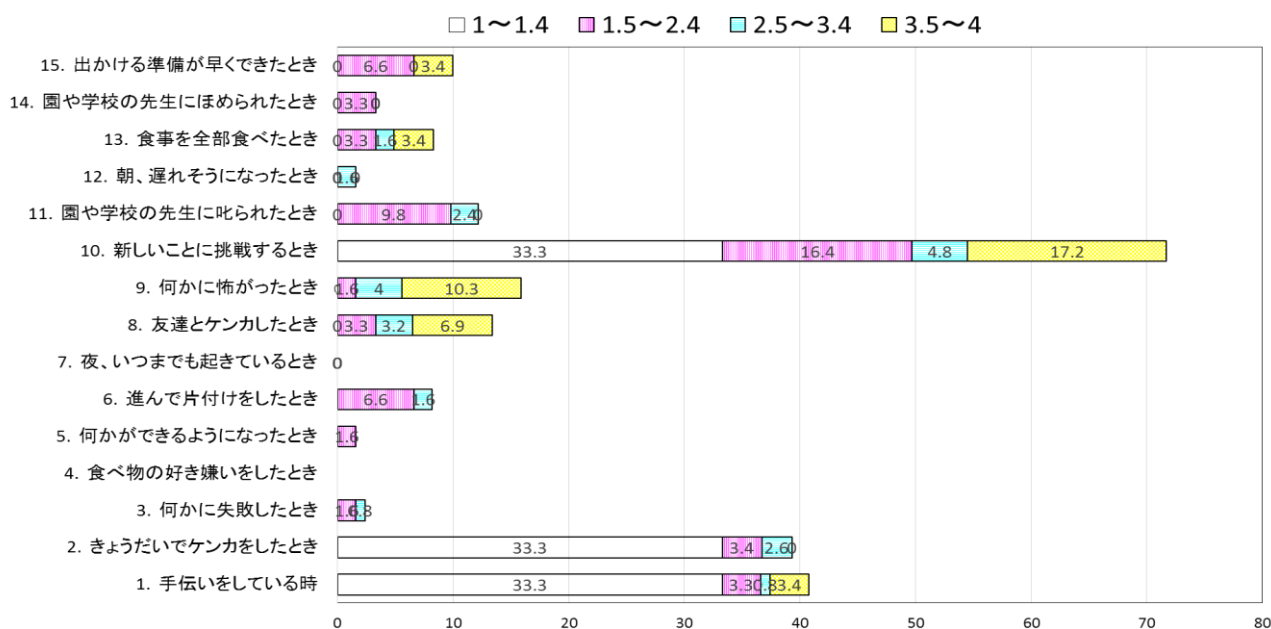


図 1 自己表明・対人積極性と馬鹿にされた言葉かけの割合 (%)

「子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる」では自己表明・対人積極性と馬鹿にされた言葉かけの割合をみた (図 1)。自己表明・対人積極性の数値が 1 番低い 1 群では、1. 手伝いをしているとき、2. きょうだいでケンカをしたとき、10. 新しいことに挑戦するとき の 3 項目

で 30.0%を超える数値となった。特に、10.の新しいことに挑戦するとき に馬鹿にされたとする学生はどの群においてもほかの項目より 1 番割合が高かった。しかし、自己表明・対人積極性の数値が低い 1 群でも馬鹿にされた言葉かけの割合が 0%の項目が多くあったことも事実である。

図 2 で自己実現的態度・充実感と叱られた言葉かけの割合から「叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう」を検証した。どの群においても叱りの言葉を受けていたが、自己実現的態度・充実感の数値の低い 1 群はほかの群より割合が高かった。7.夜いつまでも起きているとき、9.何かに怖がったとき は共に 100%をしめた。全体的に 1 群から 4 群にかけて数値が高くなるほど叱りの言葉を受けた割合は低くなっている。また 1 群と他の群を比較したとき、1.手伝いをしているとき、5.何かができるようになったとき、10.新しいことに挑戦するとき、14.園や学校の先生にほめられたとき など一般的にプラスの行動に対しても叱りの言葉を受けた割合が高いことがわかった。

次に「励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる」を自己実現的態度・充実感と励ましの言葉かけの割合（図 3）からみしてみる。励ましの言葉かけにおいては自己実現的態度・充実感の数値の低い 1 群の割合が低くなっており、項目によっては 0%のものもあった。2 群から 4 群においては同等の割合のものも多いが 3.何かに失敗したとき、11.園や学校の先生に叱られたとき については数値が高くなるにつれて割合も高くなっていった。

叱られた言葉かけと励ましの言葉かけで図 2 と図 3 を比較すると、自己実現的態度・充実感において数値の低い 1 群は叱られた言葉かけの割合が高く、2 群は半々、3 群、4 群になると励ましの言葉かけの割合が高くなっていることがいえる。

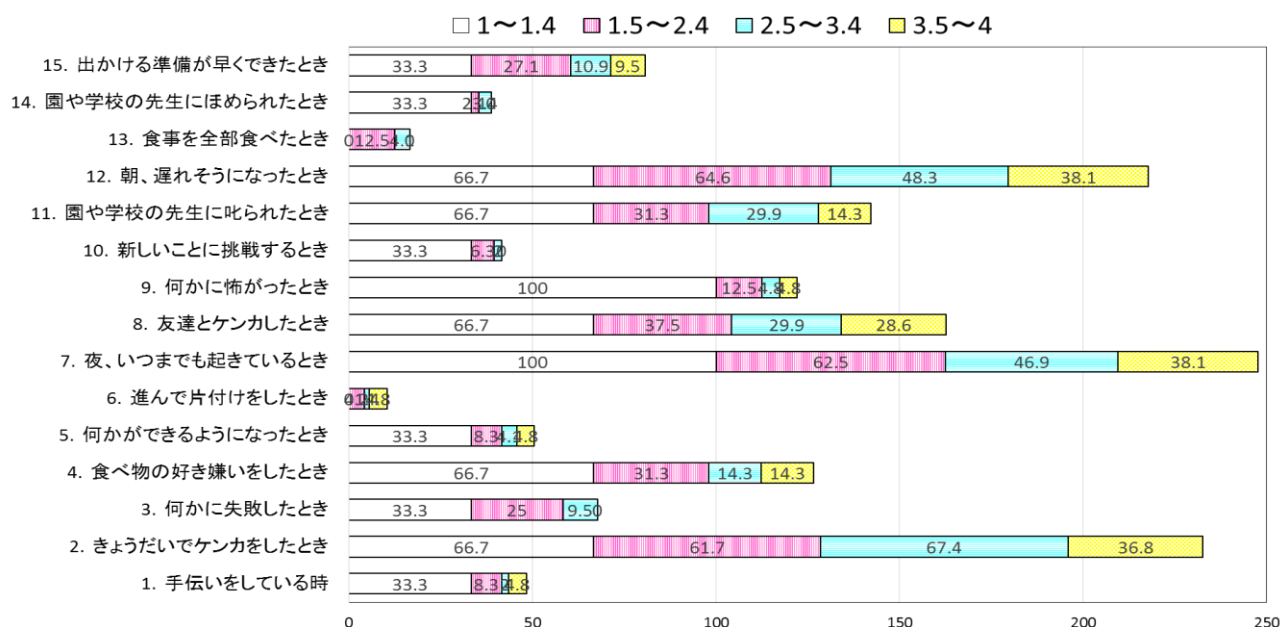


図 2 自己実現的態度・充実感と叱られた言葉かけの割合 (%)

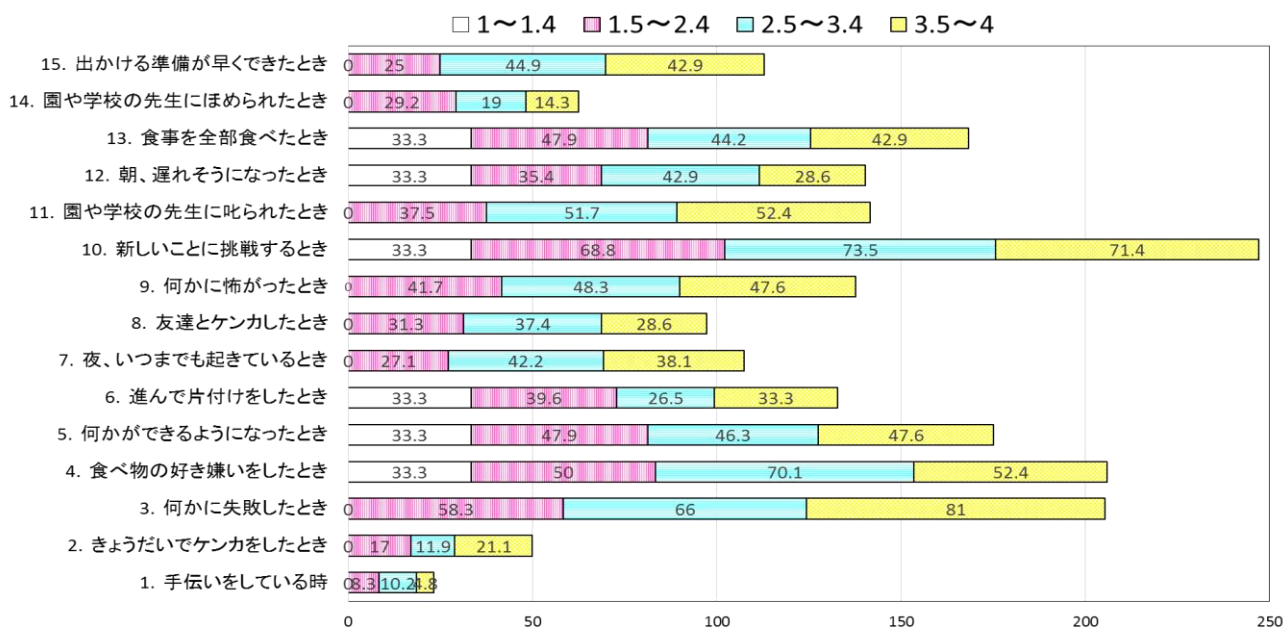


図3 自己実現的態度・充実感と励ましの言葉かけの割合 (%)

図4では、自己受容の数値と認められた言葉かけとの関連性をみる。これは「認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる」を検証するためである。自己受容の数値の低い1群は該当なしであった。ほとんどの項目において2群から4群へと自己受容数値が上がるにつれ認められた言葉かけの割合が高くなっている。4群においては3.何かに失敗したとき、8.友達とケンカしたとき、11.園や学校の先生に叱られたとき などといった一般的にマイナスと思われる行動に対しても30.0%を超える割合で認めの言葉かけだったことがわかった。

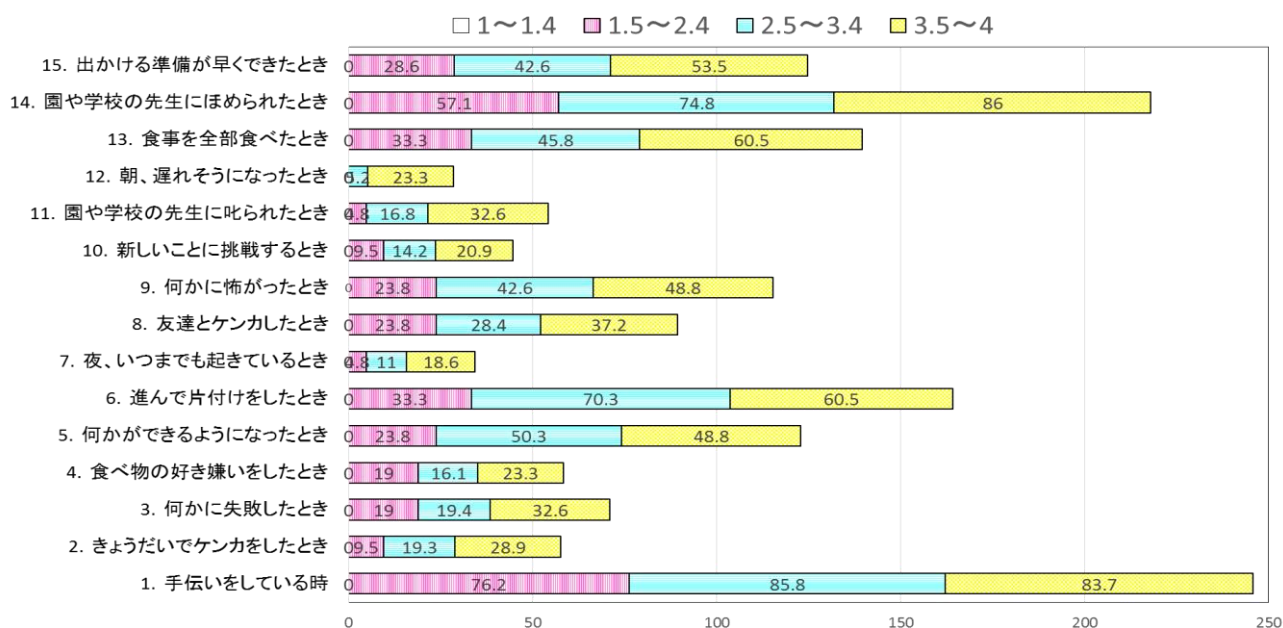


図4 自己受容と認められた言葉かけの割合 (%)



(3) 幼少期に親からかけられた言葉と現在の性格の関係について

表 1 のアンケートから個人の平均点を出し、1～1.4 を馬鹿にされた言葉が多かった群、1.5～2.4 を叱られた言葉が多かった群、2.5～3.4 を励ましの言葉が多かった群、3.5～4 を認められた言葉が多かった群としてそれぞれ「私は引っ込みじあんだ」「私は悪い子だ」「自分に自信がある」「自分が好きだ」と答えた割合をみた。1～1.4 の馬鹿にされた言葉が多かった群は該当なしだった。

図 5 は幼少期に叱られた言葉が多かった群のグラフである。どちらかといえばを含めると 73.4% が自分を引っ込みじあんだと思い、66.6% が自分を悪い子だと感じていた。また、自分に自信がないと答えたのは 73.3% であった。自分が好きかどうかについては 66.7% が好きではないと答えた。

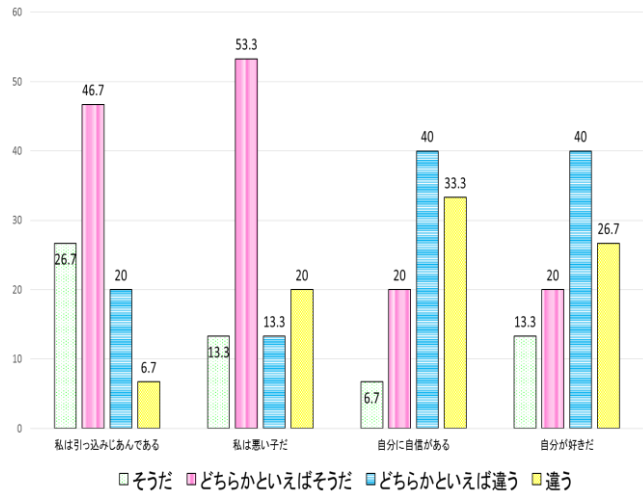


図 5 叱られた言葉が多かった群 (%)

励ましの言葉が多かった群のグラフを図 6 に示した。どの項目もどちらかといえばを選択する傾向が強い。引っ込みじあんだどうか、自分が好きかどうかは半々というところである。58.3% と高い割合を示したのはどちらかといえば悪い子ではない、50.0% をしめたのはどちらかといえば自信がないの項目であった。

図 7 に示したのは認められた言葉が多かった群のグラフである。私は引っ込みじあんだではない 41.7%、私は悪い子ではない 50.0% と 2 つの項目で高い割合をしめている。どちらかといえばを含めると 70.9%、79.2% と 7 割を超える。どちらかといえば自分に自信があるは 54.2%、どちらかといえば自分が好きだは 58.3% という結果になった。

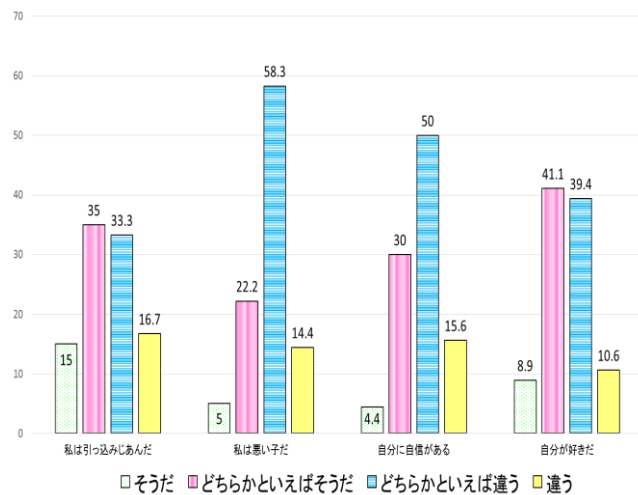


図 6 励ましの言葉が多かった群 (%)

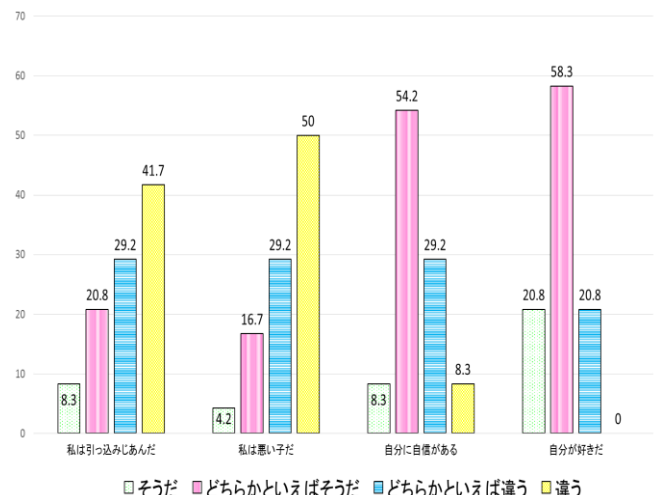


図 7 認められた言葉が多かった群 (%)

考察

本研究は幼少期の親の言葉かけがどのように子どもの考え方や性格に影響を及ぼすのか『子ども

『もが育つ魔法の言葉』ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス、石井千春＝訳（1999.PHP）に記載されている「子は親の鏡」という詩、19連の中から4連について取り上げ、関係性を検証することを目的とした。

### （1）幼少期に親からかけられた代表的な言葉について

幼少期の子どもへの声かけについて、どの項目でも馬鹿にされた言葉かけの割合がかなり低く、15項目中1項目以外はすべて5%未満であった。中には0%の項目もあり1%未満が6項目と、幼児教育に携わっていたものとしては嬉しい結果となった。項目の中で1番割合が高かったのは、10.新しいことに挑戦するときで10.0%だった。新しいことに挑戦するときは子ども自身も不安になるものである。そんなとき、身近で1番頼りされている親は馬鹿にする声かけではなく励ましや応援などの声かけが望ましいのではないだろうか。

叱られた言葉かけが高い割合をしめたのは、2.きょうだいでケンカをしたとき（63.2%）7.夜、いつまでも起きているとき（50.2%）12.朝、遅れそうになったとき（51.1%）であった。2.きょうだいでケンカをしたとき（63.2%）に対して、8.友達とケンカしたときについては、叱られた（32.0%）励まし（34.7%）認め（29.7%）とどれも30.0%程度の結果となっている。励ましの言葉かけについては、3.何かに失敗したとき（64.8%）4.食べ物の好き嫌いをしたとき（63.5%）10.新しいことに挑戦するとき（71.7%）の項目で高い割合を示した。認められた言葉かけで割合が高かったのは、1.手伝いをしているとき（84.5%）6.進んで片付けをしたとき（64.8%）14.園や学校の先生にほめられたとき（75.3%）の3項目であった。一般的に指導が必要な行動のときは叱られた言葉かけの割合が高く、よい行いのときは認められた言葉かけの割合が高いことがいえる。森下・後藤（2016）は、感謝の言葉かけが多いと他者信頼が高まるが感謝の言葉かけが多いなかで否定的言葉かけがあるほうがより他者信頼が高まることを発見している。このことから叱りや指導も信頼関係を高めるためには必要であると考えられる。しかし、なかにはよい行いをした、しようとしている場合でも叱られた言葉や馬鹿にされた言葉を受けている学生がいたことも事実である。こどもコンサルタントの原坂一郎氏は『子どもを幸せにするお母さんの言葉』（2017）のなかでマイナスの言葉を否定言葉とし、それは子どもが自分の行動に自信を失くし指示待ち的になったり破壊行動が出たりするとしている。また、永田・三崎・森（2005）は「ほめ」と「叱り」に着目した研究で「ほめ」に関しては受け手の感じ方（満足度）に違いが見られないが「叱り」に関しては「叱られ方」の違いによる感じ方（納得度）の違いが見られることを見出している。子どもを叱らなくてはいけない場面かどうかじっくり見極め、納得できるよう理由を伝え、自尊感情を思いやるのが親には求められるのではないだろうか。言葉は伝達機能を超えて心のふるさとなる。子どもが選択を迷ったとき、挫折したとき、大きな決断をするときなど、ふと親の言葉を思い出し、そっと背中を押してもらえようような言葉が宝物のように心に残されていくことを強く願う。

### （2）幼少期に親からかけられた言葉と自己肯定感の関係 （3）現在の性格との関係について

<子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる>

自己表明・対人積極性と馬鹿にされた言葉かけの関係性をみると、15項目中3項目においては数値の低い1群が高い割合（33.3%）をしめたが残り12項目においては0.0%だった。逆に数値の高くなる2群～4群で馬鹿にされたと回答している学生がおり、このことから自己表明・対人積極性が低くても馬鹿にされた言葉を受けていないこと、馬鹿にされた言葉かけを受けても自己表明・対人積極性が高いことが示された。よって、子どもを馬鹿にしたからといって必ずしも引

っ込みじあんになるとは言い切れないといえる。

＜叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう＞

自己実現的態度・充実感と叱られた言葉かけの関係性から数値の低い1群は他の群に比べて叱られた言葉かけの割合が高いことがわかった。きょうだいでケンカをしたとき、朝、遅れそうになったときについては他の群と大差はなかった。また、2群、3群、4群と数値が上がるにつれ割合が低くなっていることから自己実現的態度・充実感と叱られた言葉かけは関連性があるといえよう。さらに現在の性格との関係における叱られた言葉が多かった群のグラフからも私は悪い子だ(13.3%)どちらかといえば悪い子だ(53.3%)と高い割合で自己評価をしている。ただ、どちらかという悪い子ではない(13.3%)悪い子ではない(20.0%)と答えた学生もおり関連性はあるが一概にはいえない部分もある。

＜励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる＞

自己実現的態度・充実感と励ましの言葉かけについても少なからず関係性があると判断した。数値の高い3群、4群において励ましの言葉かけの割合が高く、数値の低い1群においては15項目中9項目が0%を示したからである。その割合が1群から4群につれて高くなっている項目もあればそうでない項目もあることから必ず強い関係があるとは言い切れないが励ましの言葉は自己実現的態度・充実感を高めるといえよう。しかし、現在の性格との関係における励ましの言葉が多かった群のグラフをみると、自分に自信があると答えたのはわずか4.4%でどちらかといえば自信があるを含めても34.4%にとどまった。1番多かったのはどちらかといえば自信がないで50%と半数をしめた。自信がないを含めると65.6%になり、励ましが直接自信に繋がるとは断言できない。

＜認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる＞

面白いことに、自己受容と認められた言葉かけの関係性では数値の低い1群がいなかった。アンケート協力者は全般的に自己受容力が高いということである。調査の結果、ほとんどの項目で2群から4群にかけて認められた言葉かけの割合も高くなっている。これに関しては強い関係性があるといえるのではないだろうか。現在の性格との関係をみても、自分が好きだと答えた学生は20.8%、どちらかといえば好きだと答えた学生が58.3%で合わせると79.1%、約8割の学生が自分を好きだと思っていることがわかる。逆に自分が嫌いだと答えた学生は0%であった。この結果から認めてあげることと自分を好きになるということは関連があるといえる。

図5、6、7をどちらかといえばを含め「そうだ」「ちがう」で比較してみた(表4)

表4 幼少期に親からかけられた言葉と現在の性格の割合

	叱られた言葉が多かった群	励ましの言葉が多かった群	認められた言葉が多かった群
私は引っ込みじあんである	73.4%	50%	29.1%
私は引っ込みじあんではない	26.7%	50%	70.9%
私は悪い子だ	66.6%	27.2%	20.9%
私は悪い子ではない	33.3%	72.7%	79.2%
私は自分に自信がある	26.7%	34.4%	62.5%
私は自分に自信がない	73.3%	65.6%	37.5%
私は自分が好きだ	33.3%	50%	79.1%
私は自分が好きではない	66.7%	50%	20.8%

幼少期にかけられた言葉で、叱られた言葉が多かった群は自分を引っ込みじあんである、悪い子だと思う傾向が高く、自分に自信がない、自分を好きではない と思っている割合が高いことがわかる。逆に認められた言葉が多かった群は自分のことを引っ込みじあんでない、悪い子ではない と肯定的に捉え自分に自信があり自分を好きだと思っている傾向が高いことがみえてくる。これは多くの育児書等にもあるように言葉かけが子どもの考えや性格に影響を及ぼすことを支持する結果となった。励ましの言葉は子どもを応援する気持ちに繋がるが、励ましの言葉が多いとプラスの言葉かけとは逆に自信をなくしてしまう傾向があることもわかった。また、多くの育児書等で「ほめて育てよう」「ほめると伸びる」などの文字を目にするが、どのようなほめ方が効果的なのかもみえてきた。励ましの言葉と認められた言葉を比較するとどちらも同じプラス言葉だが、認められた言葉をかけてもらったほうが自己肯定感が高くなることは新しい発見となった。

### 今後の課題

本研究は、短大生に幼少期に親からかけられた言葉について思い出しながら回答してもらった。幼少期の実際の言葉かけを正確に反映しているわけではないので、どれだけの信憑性があるかはわからない。しかし、松永・塚越（2010）は幼児自身の内的特性への帰属の言葉かけが後の向社会的行動にプラスの影響を及ぼすことを示しており、幼少期にかけられた言葉が後々の考え方や性格に少なくとも繋がっていることを考えると子育て中の親にとっては貴重なデータになる。

親は誰でも子どもを愛している。優しくありたいと思っている。また、幸せな人生を切り開いて欲しいと強く願っている。そのためには自分を幸せだと思えることが必須である。それは自分らしい生き方ができるかどうかにかかってくる。汐見（2012）は他者との比較ではなく「私は私」という基本的な感情の上に立って自分を受容し信頼する肯定感覚、背伸びしない自分をそれでいいと受容し自分を信じる自尊感情がこれからのグローバルな地球時代を生きる子どもにとって一番大切なことになると記している。自己肯定感・自尊心を高めるのである。ところが、どうしたらそんな親になれるのか、そんなしつけができるのかが分からずに悩んでいる親も多い。そして、育児参考書を手取る。そんな親のためにも確実なメッセージの発信を要する。今回、幼少期の親の言葉かけがどのように子どもの考え方や性格に影響を及ぼすのか「子は親の鏡」19連のなかから4連を取り上げ検証した。4連のうち2連については関係性は見られるもののそうでない割合も3割、2割と一概にいえない結果となっており、残り2連については関係性は見られないといえよう。うち1連は逆転の結果になっている。この逆転の現象にどのような意味があるのかも含め、今後もデータに裏付けされた継続的検証が必要であろう。めまぐるしい社会の変化とともに多様化する子ども達。教育現場においても足並み揃えての時代から個性を尊重する時代になっている。より1人ひとりに応じた対応が要求されるのである。妥当性のあるもののなかで例外的なものにはどのような背景があるのか、言葉かけだけではなく親の態度や子どもの性格、年齢なども関係する可能性がある。今後「子は親の鏡」における他の言葉にも目を向け検証を重ねるとともに、さらに視野を広げ幼少期の言葉かけと後の考え方・性格がどのように関係してくるのか研究を重ねる必要がある。それが今後の子育て、親の言葉かけの参考になることを期待する。

## 引用・参考文献

- Priscilla Dunstan [https://en.wikipedia.org/wiki/Dunstan\\_Baby\\_Language](https://en.wikipedia.org/wiki/Dunstan_Baby_Language) (最終アクセス 2018.1.6)
- 矢野惣一 (2014) 『子どもの人生を一生幸せにする愛の言葉がけ』 講談社
- 汐見稔幸 (2012) 『この「言葉がけ」が子どもを伸ばす!』 PHP 文庫
- ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス、石井千春=訳 (1999) 『子どもが育つ魔法の言葉』 PHP
- ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス、雨海弘美=訳 (2002) 『10代の子どもの育つ魔法の言葉』 PHP
- 森下正康・藤村あずさ (2013) 小学校の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響 Vol. 9, 125-134
- 森下正康・松山紗也 (2014) 中学・高校時代の母親の言葉かけが女子大学生の母子関係に与える影響 Vol. 10, 103-112
- 佐伯怜香・新名康平・服部恭子・三浦佳世 (2006) 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響 Vol. 7, 181-192
- 平石賢二 (1990) 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— Vol. 37, 217-234
- 森下・後藤 (2016) 児童期の母親の言葉かけと女子大学生の自尊感情や他者信頼—具体的な場面での言葉かけと特性に関する言葉かけの影響— 12,145-154
- 原坂一郎 (2017) 『子どもを幸せにするお母さんの言葉』 PHP
- 永田・三崎・森 (2005) 子どもへの言葉かけに関する研究—「ほめ」と「叱り」に着目して— 11,37-44
- 松永あけみ・塚越由佳 (2010) 大人の「言葉かけ」が幼児の向社会的行動に及ぼす影響 (その2) 59,195-204